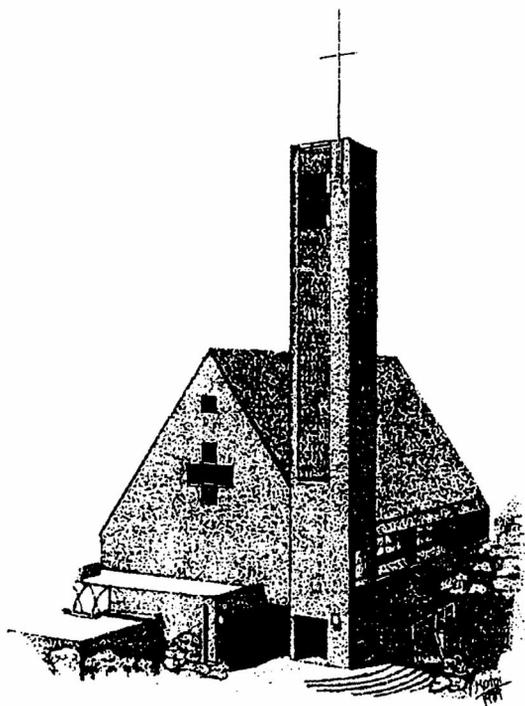


チャペルブックレット No.13

ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？  
—こどもの物語と聖書に見られる  
〈しょうがい者〉差別—

(ヨハネによる福音書9章1～41節を中心に)

荒井英子



名古屋学院大学 宗教部



あらい えいこ  
荒井 英子

---

現在、恵泉女学園大学 人間社会学部 人間環境学科准教授。

日本基督教団牧師（かつて、日本基督教団信濃町教会で10年、多磨全生園秋津教会で4年牧会）。専攻は聖書学・キリスト教史。ここ10年ほどは、ハンセン病とキリスト教との関わり、フェミニスト神学、キリスト教女性史を中心に研究活動を行っている。

著書に『ハンセン病とキリスト教』（岩波書店、1996年）、『近代日本のキリスト教と女性たち』（共著、新教出版社、1995年）、『新共同訳旧約聖書略解』（共著、日本基督教団出版局、2001年）、『女性キリスト者と戦争』（共著、行路社、2002年）など。

# ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？

## こどもの物語と聖書に見られる

### <しょうがい者> 差別

(ヨハネによる福音書 9章1～41節を中心に)

荒井英子

## はじめに

講演に先立ちまして新約聖書、ヨハネによる福音書9章を読んでいただきました。ここは今日の講演のテーマ「障害者」問題について考える際に大事な問題提起をしている聖書箇所だからです。生まれたときから目の見えない人をイエスが癒したという奇跡物語ですが、この物語は圧倒的に障害者に勇気や希望を与えてきた反面、少なからぬ人々に苛立ちや失望も与えてきました。皆さんはこの物語のどこかに違和感を覚えなかったでしょうか？

私はある方から、9章3節の「神の業がこの人に現れるため」という言葉をめぐって、胸をえぐられるような問いを投げかけられたことがあります。その方は中途失明者で、喜寿を超えるベテランの牧師です。彼が電話の向こうで言うには「私は、ヨハネ福音書9章の生まれつきの盲人にイエスが語ったとされる『神の業がこの人に現れるためである』という言葉に、いまだ納得がいく説明を聞いたことがない。あなたはどうか考えるのか」。その口調には苛立ちが感じられました。「障害を持つ自分は、神の業が現れる『ため』の存在なのか、自分以外の何かの『目的』のための存在なのか…。自らの生が、目的化されているような言い回しはとても容認できない。そんな言葉を福音として聞くことはできない。冗談じゃない」。その後も電話のたびに、彼は私に憤りをぶつけてきました。「私はちっとも納得していない」と。

当事者である彼が、日々考え抜いてそれでも納得していない、そんな問いに私がまともに答えられるはずもありません。しかし、彼の突っかったようなその物言いに、私はかつてのある人との出会いを思い起こしていました。それはちょうど彼と同じ年格好の、一人のハンセン病者との出会いでした。私がハンセン病者に始めて出会ったときのことについては、私の書きました『ハンセン病とキリスト教』の「あとがき」

にも記していますが、極めて緊張に富んだものでありました。決して心温まるハッピーな出会いではありませんでした。今から25年も前のこと、国立療養所多磨全生園の文化祭で、初めて会う私にこう語りかけてきた一人の老人がいました。「あんた、キリスト教の牧師やてな。なんで聖書にはあんなに『らい病、らい病』で書いてあるんや。あんなに『らい、らい』言うから、わしらは差別されるんや。なんとか言うてみい」。それが初対面の私への言葉でした。老人の眼光は鋭く、全く容赦ありませんでした。私は生まれて初めてハンセン病者と向き合い、その問いに答える術もなく、ただ全身を耳にして彼の言葉に聞き入るほかありませんでした。

後から分かったことですが、彼はずっと以前に洗礼を受けたクリスチャンでした。しかし彼は教会から離れ、園内の他の多くのクリスチャンたちとは違って、自分に負わされた苦しみ 十字架と言ってもいいでしょう を受け入れてはいませんでした。なぜ、ハンセン病なんかになったのか。なぜ他の人ではなく、この自分がなったのか。若い日に発病して以来、50年以上も自問自答を繰り返し、納得のいく答えを見出していなかったのです。彼は発病と同時に家族を捨て、故郷を捨て、そして自分の名前を捨てました。長い間放浪し、療養所も転々とし、全生園に落ち着いて70歳もとうに越えたというのに、彼は決して病気の自分を受け入れていませんでした。その口調で小一時間ほど、彼はほとんど私を糾弾し続けるという調子で日頃の憤懣やるかたない思いをぶつけ、そして別れ際にこう言ったのでした。「また来てくれるか」。

私は一瞬、自分の耳を疑いました。老人はなおも語気荒く言葉を続けました。「ボランティアだ、見学だと称して、大勢の若者が園にやって来る。園の方からそういう若者に何か話をしてくれと頼まれるので、自分は一生懸命話す。だけど、彼らが帰った夜はむなしくて眠れない。結局自分は、若僧らに弄ばれたに過ぎない。一回こっきり、わしらを見に来ただけのあんな若僧に、なんであんなに夢中になって話したんやろ。

あんたは今夜わしを眠らせてくれるのか。きっと、また来てな」。彼の目からは怒りとも悲しみともつかない涙が飛び散っていました。

こうして、実に厳しい水先案内人を介して、私はハンセン病療養所の世界を知るようになりました。彼は孫ほどの年齢の私に、「これも読んでみな。これも礼拝の話の足しになるから読みな」と 当時私は信濃町教会の副牧師をしておりましたが ハンセン病関連の本を矢継ぎ早に送ってきました。そんなある日、例によって一冊送られてきた本の扉を開けて、私はハッといたしました。そこには次のような言葉が書き付けてありました。「辛かったけど生きられた。私どもの名を呼んで下さるお方があり

ましたので。私は何度も何度もそれを読み返しました。彼はきっと、神とも自分とも和解したのだと思いました。しかし当の彼は、決して神という言葉の口にしませんでした。もうすでに亡くなってしまいましたが、彼と付き合っている間、私は一度も神という言葉の彼の口から聞いたことはありませんでした。

私の人生の途上で出会ったこの二人は、障害と共に生きる中から、胸をえぐるような問いを、私に投げかけました。それはより根源的には、人間とは何なのか、障害や病を持つか持たないかで、人間として何が違うのかを問うていました。本来、違うはずはないのです。しかし現実の社会の処遇はあまりにも違うのです。ですから私は、彼らの問いに応えなければなりません。たとえ彼らが自分と和解したとしても、それで終わりにはなりません。彼らと隣人として生きるためのつながりを築くために、私があるいは社会がどう変わるべきなのか、それを模索しなければなりません。「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの?」という問いも、実はこのような問題意識から来ています。

## 1. 障害学との出会い クララは歩かなくてははいけないの?

さて、本題に入りましょう。今日は可愛い講義のタイトルになっていますが、これはある本からヒントを得て付けたものです。

2003年1月、私は明石書店の編集者から近刊予定のロイス・キース著『クララは歩かなくてはいけないの? 少女小説にみる死と障害と治癒』に、解説文を書いて欲しいとの依頼を受けました。ハイジの友だちクララ、彼女は歩かなくてはいけないの? という、ショッキングなタイトルの本です。編集者が言うには、今も読み継がれる欧米の名作に潜む障害観の背後にはキリスト教の考え方があるので、それについて日本の読者に分かるように書いて欲しいというものでした。

著者のキース自身、交通事故によって車椅子生活をしていますが、彼女が本書の中で取り上げた作品は、『ハイジ』や『若草物語』、『ジェイン・エア』『すてきなケティ』『秘密の花園』など1850年以降の少女向け小説です。キースいわく、これらの本の中には必ずといっていいほど歩くことのできない身体の障害をもつ人物が登場します。皆さん、気づいていましたか。

しかも古い作品ほど、障害と罪とを結び付ける視点が色濃くあらわれ、たとえば『すてきなケティ』などはその最たる例として取り上げられます。おてんばで「女の子

らしくない」ケティは、母親代わりのイジーおばさまの言いつけを無視してブランコに乗って大怪我をして歩けなくなります。しかし、ベッドの中で何年も過ごすうちに、忍耐強く思いやりのある「女性らしい」大人に成長して、その時点で再び歩けるようになります。

時代が少し下ると、障害を罪というよりは本人の性格上の欠点と結び付けるようになります。従って宗教色は薄まっていくのですが、やはり欠点の克服と治癒を関連づける点では基本的には変わりません。たとえば、『ハイジ』のクララや『秘密の花園』のコリンは、性格的な弱さや甘え、消極的で依存的な姿勢を克服することで歩けるようになります。つまり「障害は克服されるべきもの」であり、それを克服できないのは弱い者だというメッセージが、少女小説を通して発信され続けることになります。そういう考え方は、キリスト教の教えと複雑に関連して、現在も残っていると著者は問題提起しています。

しかしキースはこうした物語の「改訂版」を書くべきだということではありません。彼女は幼い頃、これらの物語が大好きだったし、ほとんどのものは今でも大好きだと言います。ただ、彼女が問題にしたいのは、読者がこれらの物語から何を学んだか、その教訓が身体障害者に対するイメージにどのような影響を与えているのか、また当事者はそれをどう受けとめたのかということです。

実際、障害児が『ハイジ』をどう読んだのか、キースの本の中から一つ紹介しましょう。『ハイジ』の大ファンであり、クララのように車椅子を使っている少女が見た夢の話です。彼女は9歳の時に、休暇旅行でスイスに連れて行ってもらうことになりました。山に行くのを楽しみにしていると、彼女は恐ろしい悪夢をたてつづけに見るようになります。その夢の中では、自分の足が命を持つようになり、動けない彼女の身体から足が逃げていくのです。いつも彼女は、自分の足が山を下りて逃げていくという怖い夢が目が覚めました。時には夢の中で自分の足を切り落とし、彼女の「本当」の部分である胴体を残して足を逃がすことを想像することによって、自己保存の感覚を確かめることができたと言います。皆さんは、この夢をどう受けとめますか。

もうひとつこのような問題を考える上で私が深い示唆をあたえられたのは、斎藤道雄著『悩む力 べてるの家の人びと』です。襟裳岬に近い海辺の町、浦河に、古い教会の建物を作り直して出来た精神障害者の共同住居「べてるの家」のことは、今日多くの人に知られています。斎藤さんは本書の中で、精神障害者の社会復帰問題に言及して次のように論じています。「自立といい社会復帰といい、そのほとんどは健常者が

唱え、健常者を基準としている。少しでも健常者に近づくこと、病気を治すこと、幻覚や妄想を取り去ること、立派な人間になって一人前に働くこと、このようなことがイメージされている。そうしたことのすべては、『病気であってはいけない』『いまのままのお前ではいけない』というメッセージをあくことなく発信し続けているのではないか。…多くの人が一生をこの病気と共に過ごさなければならないのだとすれば、病気を治せ、健常者になれと言われ続けることは、すなわちその人が一生『いまのあなたであってはいけない』と言われ続けることになる。そうではなく、病気があるうがなかるうが『そのままがいい』という生き方があるのではないか。』

実は「クララは歩けなくてははいけないの？」というキースの問いは、この斉藤さんの問いとつながっています。

古典的な少女小説の登場から一世紀の時を経て、1980年前後にイギリスで確立された学問が「障害学」(Disability Studies)です。そもそも障害学の出発点には、「障害とは何か」という根本的問いがありました。障害当事者でもある星加良司<sup>ほしかりょうじ</sup>さんという人が「これまで『障害』をめぐって『問題』とされたのは、多くの場合障害者を取り巻く周囲の人々が『問題』として捉えた事柄であって、障害者自身にとって『問題』として感じられた事柄ではなかった」と端的に言っています。さらに彼は「障害者は医療においては治療やりハビリテーションによって『正常』へと近づけるべき存在として、教育においては社会への『適応』を支援すべき存在として、福祉においては保護と同情の対象となるべき存在として見なされてきた。このことが結果として障害者に過度の努力を要求し、否定的な価値を押し付けることにつながった」と指摘しています。

したがって障害学は、障害者自身による問題の定義付けから出発します。まず「障害」についての理解そのものが、従来のものとは根本的に異なっています。「障害」をインペアメント(生理学的損傷=目が見えなかったり手足が動かなかったりすること)とディスアビリティ(社会的不利益=旅行に行けなかったり教育を受けられなかったりすること)に分けて考えます。星加さんの説明によれば、障害当事者にとってはインペアメントがあるから「不幸」という捉えられ方は的外れであり、もし、彼らが「不幸」であるとしたら、それはディスアビリティのためであり、解決すべきはディスアビリティであると主張します。従来の「障害」理解では、インペアメントを克服することによってディスアビリティの解消は目指されたわけですが、障害学においては、ディスアビリティの原因は社会の側にあり、したがって社会を変えることによってディスアビリティは解消されるべきだという発想の転換を行います。障害者は無力なの

ではなく、社会が構築した様々な障壁によって「無力化されている」(disabled)の  
という理解です。

そうすると、聖書にふんだんに出てくるイエスの癒しの奇跡物語はどう読まれるべき  
なのでしょう。イエスの前にあらわれた数々の難病患者や障害者は癒される必要  
はないのか、さらに、現在、「そのままがいい」という生き方を模索している障害  
者にとって、癒しの奇跡物語はまさに躓きの石ではないのか。障害学からの問い  
かけを受けて、もう一度聖書を読み直さなければなりません。

## 2. イエスの癒しの物語 ヨハネによる福音書9章を読み直す

それではヨハネによる福音書9章の冒頭をもう一度読んでみましょう。「さて、イエ  
スは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに  
尋ねた。『ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。  
本人ですか。それとも、両親ですか。』イエスはお答えになった。『本人が罪を犯した  
からでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである』。

ここに描かれているのは、生まれつき目が見えないという、いわばインペアメント  
の理由を問う弟子たちと、その答えを拒否するイエスの姿です。信仰の世界では、し  
ばしばインペアメントに意味付けをしたり、理由探しをしたり、さらにそれに対する  
答えを提供してきたりしました。人はなぜ障害を負うのかという問いを發し、それ  
に対する一通りの答えを聞き、その結果として、ユダヤ社会では律法を守って正しい人  
間になっていくという道筋に導かれます。それは一つの信仰のルートでもあります。  
弟子たちが生まれつき目の見えない人を見て「ラビ、この人が生まれつき目が見え  
ないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」と問  
うのはそういうことです。そして、弟子たちの質問の前提になっているのは、病気や障  
害また不幸は、すべて罪に対する神の正当な罰だという旧約聖書的・後期ユダヤ教  
的な因果応報思想です。

しかし、イエスはそういう道筋を断ち切ります。イエスの答えは、生まれつきの盲  
人のいかなる罪をも否定します。それと同時に「本人が罪を犯したからでも、両親が  
罪を犯したからでもない」とは、イエスが理由探しそれ自体を拒否した言葉でもあり  
ます。イエスは当時のユダヤ教の社会通念・信仰理解を否定するのみならず、イン  
ペアメントに宗教的、社会的意味付けを行うことを拒否しました。したがってイエスは



答えの提供をも拒否します。「神の業がこの人に現われるため」とは、旧来のユダヤ教の障害者理解にとって代わる「新しい解釈」を提示したではありません。

確かにこの言葉は大勢の障害者に勇気や希望を与えてきたことも事実です。因果応報思想から解放され、生きる意味や自分の障害の積極的意味を教えられたとの障害当事者の証言も聞かれます。弱さ、障害を負った身体を丸ごと肯定され、否、障害ゆえに神の栄光を顕わす使命を与えられたのだと。しかし反面、この言葉は障害者に苛立ちや失望も与えてきました。障害をもつ自分は、神の業が現れる「ため」の存在なのか、自分以外の何かの「目的」のための存在なのか…と。

私自身は、ここでイエスが旧来のユダヤ教の障害者理解にとって代わる「新しい解釈」を提示したとは考えておりません。しかし、80年代以降の日本のキリスト教界が提示した「障害者神学」の歩みをたどってみると、障害者はその障害ゆえに神の栄光を現す特別の使命を負っているという論調がほとんどで、私はとても違和感を覚えしました。しかも、日本の障害者神学の先駆者、熊澤義宣氏は、ヨハネによる福音書9章3節のイエスの言葉は因果応報説に代わる新しい福音的障害者観を提示するものであるとして、代理苦難論を展開します。

それは一言で言うと、障害者は私たちの代わりに苦難を背負っている存在だという理解です。熊澤氏が注目している清水<sup>ちみず</sup>菟子<sup>うし</sup>さんの言葉を借りれば、「なぜ私ではなくて、彼が苦難を負うべく選ばれたのか」という不条理への問いは、やがて実は私も彼であり得たのだ、彼は私の代わりに苦難を背負ったという負い目の意識と感謝へと結実していった。…信仰者の目には、苦難にある人において苦しんでおられるのはキリストであり、キリストは私に代わって苦しんでいる以上、苦難にある人が私に代わって苦しんでいる、ということは当然の帰結である」と言います。

このような苦難代理論はキリスト教界に広く受け入れられています。しかし私は、あのハンセン病療養所で出会った老人は私の代わりに苦難を背負っているとは言いたくない、否、彼にそのような苦難を負わせてはならないと思うのです。私はこのような因果応報説から苦難代理論への解釈の道は辿りません。いかなる障害者にも宗教的な意味付けをしたり、苦難代理の役割を押し付けてはならないと思います。

私はイエスは障害者の新しい意味付けをしたというよりも、インペアメントの宗教的な理由を問い、宗教が何らかのそれに根拠を与えるという道筋を断ち切ったのだと思います。「神の業がこの人に現れるため」の「この人に」はギリシャ語でエンアウトイと言う言葉が使われていますが、これはある事が行われる対象を表わし、「この人に

対して」という意味です。すなわち、目が見えない人のインペアメントにおいてというのではなく、その人に対して神の業が現われるという意味です。障害のあるなしに関わらず、あの人にもこの人にも神の業は現れます。しかしこれでは、「なぜ」「だれが」と問う弟子たちに対する答えになっていません。まさしくイエスは、弟子たちの問いにまともに答えないのです。

イエスの弟子もファリサイ派も、因果応報の罪理解を持っている点で変わりません。要するに、過去に規定されて生きているからこのような問いが出てくるのです。誰が罪を犯したか、自分が、両親か、はたまた先祖が罪を犯したからか…。彼らは過去から生きています。しかし、人は過去ではなく、今を生きるしかないのです。イエスはここで、過去ではなく今を生きよと呼びかけられます。とりわけ、罪人のレッテルを貼られていた障害者や難病患者たちに対して、律法の価値基準に囚われず、今を生きよと呼びかけておられるのです。そしてイエスは、障害や病氣と結びついて貼られた「罪人」というレッテルを彼らから引き剥がします。「あなたは罪人ではない」のだ、と。それがイエスの癒しの業です。神の業がこの人に現れるためとは、そのようなイエスの生き様から出た言葉だったのではないのでしょうか。

しかも、イエスを介してこの男に対して現れた神の業とは、期待されるような手放しの喜びのことがらではなく、むしろ彼は目が見えるようになったことによって厳しい状況へと押し出されています。不思議なことにヨハネによる福音書には、この目が開かれた元盲人の喜びの描写はありません。逆に目が見えるようになった結果、それをめぐる近所の人々の反応、ファリサイ派の執拗な事情聴取と尋問とは、彼に極度の緊張を強いるものでした。

イエスの治癒奇跡物語の最後には、しばしば「家に帰りなさい」あるいは「行きなさい」という帰還命令が記されています。実際にこの物語では近所の人々や両親が登場しますが、決して彼を好意的に迎えてはいません。目が見えるようになったことを誰も喜んでくれていない。一番喜んで欲しい人が、「よかったなー」と言ってくれていません。彼を認知しない近所の人々に向かって、9節で「わたしがそうなのです」と叫ぶ姿は、現代のハンセン病者の里帰りの難しさや二重写しです。また、息子の目が見えるようになったいきさつを証言すると村八分になる恐れがあると分かれると、彼の両親は「知らぬ存ぜぬ」を通しています。彼の存在をかき消すような言葉が飛び交うコミュニティのただ中で、彼は叫びました。「わたしがそうなのです」。これは自らの

尊厳を宣言する叫びでした。彼の人権宣言です。長い論争物語を通して浮かび上がってくるのは、彼が憐れみの対象としてではなく、一人の尊厳をもった人間として主体性を確立していく姿です。

周囲から拒まれた記憶、同情まじりの蔑視によって心を踏みにじられた体験、このような蔑視と拒絶からの解放なくして癒しはありえないでしょう。イエスの周りの障害者や難病患者は、障害や病気によって傷ついている以上に、蔑視や拒絶によって傷ついていたでしょう。彼らにとって、インペアメントの回復よりも、イエスによって罪人のレッテルを剥がされ、蔑視や拒絶から解放され、自らの尊厳を回復することこそが「奇跡」の原体験だったと思います。

### 3 . 救済の対象から解放の主体へ

さて、13節以下によりますと、この癒しの出来事が律法によって禁じられている安息日に行われたことが、大掛かりな論争に発展していく原因になっています。明らかに律法破りのイエスについて、かつて盲人であった男は淡々と証言し、身の危険も顧みず17節で「あの方は預言者です」と答えています。興味深いことには、当のファリサイ派の人々の間でも、イエスの評価をめぐって意見が分かれたとあります。

さらに、ファリサイ派とあの癒された盲人との間により決定的な分離が生じました。24節で「あの者が罪ある人間だと知っている」というファリサイ派の人々を向こうにまわして、「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです」と堂々と主張しています。さらにしつこく尋ねる彼らに、27節「もうお話したのに、聞いてくださいませんでした。…あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか」と強烈な皮肉を込めて切り返しています。権威をものともしていません。イエスを罪人と断罪し、法の番人を任じるファリサイ派に対して、法を逆手にとって、31節以下では「神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。…あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです」と言い切り、最後にはイエスに導かれてイエスを「人の子」すなわち真の救い主と告白して礼拝するところまで至っています。

彼に現れた神の業とは、まさにこのような救済の対象から解放の主体へと促す道筋でした。こうして命がけの論争を通して主体性を確立していった彼に、最後に突きつ

けられたのは、共同体を追放されるという決定的な現実でありました。しかし、彼は今やイエスを見えています。イエスの誰たるかを見えています。逆にモーセの弟子を自称するファリサイ派の人々は、イエスに対して目を開くことが出来ませんでした。39節、「こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる」という現実が顕わになったのです。

イエスはインペアメントと罪との間には関係がないと言い放つ一方で、逆に「見える」と言い張るファリサイ派の罪を鋭く問題にします。40～41節では、権威が、伝統が、宗教的常識が、信仰的熱心が障壁となって、彼らには真実が見えていません。自らの限界が見えていないのです。しかし見えていると信じて疑わないこと、それが罪であると。変わらなければならないのは「生まれつきの盲人」ではなく、ファリサイ派あるいは近所の人々、また家族の方です。これが障害学のいうディスアビリティでありましょう。

そして私たちもまた、この「見える」と言い張る罪と決して無縁ではありません。健常者になることが、唯一の「幸せの方程式」と信じている私たちには頑なさがあります。障害者の社会復帰をうんぬんする前に、問われるのは私自身の生き方、私たちが暮らす社会の在り様です。クララは歩かなくてはいけないと思い込んでいる私たち、その価値観を根底から見直さざるを得ないでしょう。

イエスは生まれつきの盲人に、インペアメントを克服するように努力を強いたり、罪の悔い改めを迫ったりしていません。むしろ「見える」と言い張る人々の心の闇を問題にします。私たちの課題は障害者を苦難の代理人として宗教的存在に祭りあげることではなく、「見える」というおのれの罪と一人ひとり向き合って、私たちの社会のディスアビリティを切り崩していくことではないでしょうか。でも、どうやって、ディスアビリティを切り崩していったらいいのでしょうか。

## 4. 「見える」という罪からの解放 心を開く

よしいひろあき  
好井裕明さんという方が書いた「障害者を嫌がり、嫌い、恐れるということ」という論文があります（石川准・倉本智明編『障害学の主張』）。好井さんは、障害者差別を初めから人権侵害として整理したり、単に偏見が差別を生むといった常識的な枠で理解するのではあまり意味がないと言っています。偏見が差別を生み、差別が排除を生むという公式を理解しても、差別の問題の核心に迫れないと言うのです。むしろ差

別する過程<sup>プロセス</sup>それ自体を解読する必要があるとして、「障害者フォビア」に注目しています。「フォビア」とは「～に対する嫌悪、恐怖」という意味です。つまり障害者フォビアとは、「障害者嫌悪、障害者恐怖」と言ってもいいでしょう。

では嫌悪感を生む核にあるものとは何でしょうか。好井さんは「他者が自分の世界へ侵入してくること、自分の世界が脅かされることへの恐怖」と分析しています。好井さん自身の言葉から少し引用してみましょう。

「混んでいる場所で、車イスの障害者が嫌がられる。人より多くの空間や時間をとる障害者の存在は、嫌がる人にとって自分の通常の生活空間・生活時間が脅かされることになる。目の前にいる障害者をジロジロ見る。にやにや笑う。ジロジロ見たり、笑ったりする人にとって、障害者と出会ったりした次の瞬間、彼らが自分の生活世界に入り込んできたとき、どのように対応していいか分からないという戸惑いや恐れがあるろう。自分の世界を守るために、これ以上自分に近寄るな、というサインが、にやにや笑いかもしれない。銭湯で障害者と他の人を同じ風呂に入れない。障害者が暮らしている家の前を、小学生が息を止めて駆け抜ける。これは、いわゆる汚染、感染への恐怖、障害がうつることへの恐怖の端的な現れだ。風呂の湯に障害のものが溶け出すわけではない。ただわたしたちは裸であるという、もっとも身体的に無防備な状態のとき、自分の身体や世界が脅かされる危険性をもっとも高いと思ってしまう。小学生たちももちろん本気で汚染するなどとは思っていないはず。…でも息を止めて通り過ぎるという冗談行為は、…障害者が自分の生活に侵入してくること、自分の世界が脅かされることへの強烈な恐れの表明とも読める」。

好井さんはこのような事例を示しながら、「障害者フォビアの核心にあるもの。それは、わたしたちがいまだ障害者を他者として理解できない現実であり、わたしたちが障害者を他者として常識的に出会えないことからくる恐怖であり怯えであり不安ではないだろうか」と問いかけています。では、どのようにすれば、フォビアの感情から私たちは解放されるのか。好井さんはこう言います。「フォビアの感情を隙間にねじ込んでいこうとする一歩手前に自分がいると感じた瞬間が勝負だ…。言い方を変えれば、人が差別することの意味を考えることができるのは、いままさに差別をしようとしている瞬間、自分自身の姿をみることから可能になるということだ。後からいくら厳しく指摘を受けたとしても、反省はできるが、差別している自分の姿をなまなましく生きることなどできない」。

この好井さんの示唆深い文章を読んで、私は再び自らの経験がよみがえってきました。それは私にとってまさに「ハンセン病フォビア」の原体験とも言うべき、あの日の光景です。私とハンセン病患者との出会いは冒頭でも触れましたが、あの日は老人とのやり取りだけで終わらなかったのです。老人から与えられた重い問いを抱えながら、昼近くなったので、私は彼と共に模擬店の喫茶室に出かけ、当日のメニューから大好物のおしるこを注文しました。私のお腹は既にグーグー鳴っていましたので、おしるこが運ばれてきた時、私はすぐにもお椀を空にできると思っていました。しかし、嚙んでも嚙んでも飲み込めない。おかしい、何だろうと思って、一生懸命飲み込もうとすればするほど、口から溢れそうになります。自分のどこかで、何かが、それを食べることを拒否しているのです。頭では差別してはいけないと分かっているし、あからさまな差別など決してしない。しかし体が受け付けられないのです。おそらく好井さんの言葉で言えば、私はハンセン病患者を他者として、隣人として、理解できていない現実のただ中にいました。そしてハンセン病患者がおしるこを介して自分の世界に侵入してくることを恐れたのでしょう。私はそのとき、自分の正体を見ました。私の心にはこんなにも棘がある！

さらに駄目押しの出来事が続きました。あるクリスチャンの入所者の家に招かれ、10人ほどの人々と親しく交流の時を持ちました。皆、気持ちよく迎え入れてくれ、手作りのケーキ等でもてなされました。帰り際、皆が私に「先生はお若いんだから、このケーキを持って帰って、夜にでも食べなさい」と言いながら、あっという間に5~6個も集まったケーキを箱に入れてお土産として持たせてくれました。しかし私は、彼らの好意の贈り物をどうしてもアパートには持ち帰れなかった……。途中、高田の馬場の駅のトイレのゴミ箱に泣きながら捨てたのです。

私はその日、「ハンセン病フォビア」の感情を悟られまいともがきつつ、他方でどうしようもなく差別している自分の姿を生々しく見ていました。彼らは私を差別しなかった。彼らは私を拒否しなかった。しかし私は、した、のです。玉葱の皮をむくように、むいてもむいても私には差別する心があると知らされました。そして、そういう自分を認めざるを得ませんでした。あとで振り返ってみて、唯一その日の私に救いがあるとすれば、フォビアに苦しむ自分や、差別する自分から決して目をそらさなかったことだけでした。しかし結果として、自分がそういう人間であることを認めることが、ハンセン病患者と隣人として常識的に出会うキッカケとなっていったと思います。好井さんが言うように、あの瞬間が勝負だったのだと思います。

出会って25年の歳月を振り返ってみると、ハンセン病者を愛することは、それほど難しくはありませんでした。最も愛することが難しいのは、私自身でした。そういう自分との和解を経て、神と隣人のゆるしを素直に受け入れつつ、自己形成をしてきたように思います。関わらなければ、私は本当の挫折も絶望も知らないままにいたかもしれません。差別する人はどこか他にいるのではない、私が差別するのだということに、気づかずにいたかもしれません。私はハンセン病者から愛されることによって、愛するとはどういうことを学び、自分と和解し、生き直す勇気をもらいました。あのかのときの「きっと、また来てな」の呼びかけは、天の声だったかもしれません。

「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？」という問いかけは、「クララはクララのまま、そのままで」幸せという社会を、クララと一緒に創れないのか？という呼びかけです。この呼びかけにどう応えるか。クララを憐れむのでもなく、迷惑がるのでもなく、自立を強制するのでもなく、苦難の代理人にするのでもなく、支えあう隣人として生きるつながりを築いていく。そのためにはむしろ、私たちの方が変わらなければなりません。大切なのは関わること、そして違いを受け入れ合って、つながっていくことです。私たちは限界だらけの人間です。しかし常に自分を訂正する勇気を持ち、自分が変わる可能性に開かれていれば、障害の有無によらず優しさをたたえてつながっていくことができると信じます。

2006年11月17日（金）名古屋学院大学秋の宗教講演会

**「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？  
こどもの物語と聖書に見られる  
<しょうがい者>差別」**

（ヨハネによる福音書9章1～41節を中心に）

**講師 荒井 英子**

チャペルブックレットNo.13

---

2007年5月1日発行

編集・発行 名古屋学院大学 宗教部  
〒456-8612  
名古屋市熱田区熱田西町1番25号  
TEL 052-678-4096

印 刷 佐川印刷 株式会社

---